

topic
1

第15回 林雅子賞が決定しました

第15回 林雅子賞の選定が、2017年2月に、日本女子大学 目白キャンパスで行われました。

今回は選定委員長に手塚貴晴氏（建築家）、選定委員に西田司氏（建築家）、阪田恵美氏（建築家/住居学科39回生）を迎え、公開で行われました。

応募者によるプレゼンテーション、質疑応答のあと選定委員の先生方による白熱したディスカッションが行われ、第15回林雅子賞に高橋和佳子さんの作品と、遠藤由佳さんの作品、2作品が決定しました。

林雅子賞とは…

日本女子大学住居学科 卒業制作、及び大学院修士制作を対象とした賞で、日本女子大学家政学部生活芸術科住居専攻（1962年より家政学部住居学科）の第一期生である国際的建築家林雅子先生を記念し、優れた女性建築家の育成と本学住居学科の発展のために、2002年に「住居の会」(日本女子大学住居学科同窓会)により創設された賞です。
(住居の会 HPより <http://jyukyo.net/>)



選定委員の先生方と、受賞者・応募者の学生のみなさん



林雅子賞

日本女子大学 大学院
高橋 和佳子さん

2016年度卒業 建築デザイン専攻 篠原研究室

JIA城戸崎賞

この作品はJIA東京都学生卒業設計コンクール2017において城戸崎賞を受賞しました



title

荘だ、大森に住もう。

—高橋荘の孫が提案する『荘』の未来—

concept

高橋荘の孫として「荘」の未来を考える。

祖父が所有する築約60年の高橋荘は東京都大田区大森西にある木造賃貸。空室が続き耐震面も懸念がある。周辺には同じ状況の「荘」が多く残っている。一方、敷地となる大田区は羽田空港近くの宿泊施設不足で、民泊の条例化が2016年に施行された。

そこで荘という言葉が持つ、仮住まい/宿泊所の2面に注目し、民泊をキーワードに荘のリノベーションをする。オーナーと民泊宿泊者のニーズに昔ながらの荘という資源で応える。銭湯に通う地域依存な生活が続くこの住宅地で、改修の際、大田区の要素から連想されるアメニティを荘に追加する。自転車で点在する荘を行き来することで住宅地全体が1つの住まいとなる、住民と民泊の「荘ネットワーク」を提案する。

手法は、それぞれの荘の立地に対応させて、住環境向上のための増減築、耐震補強のための室内のアーチ(耐震壁)/屋外の補強の縁側(軸組)を組み合わせて用いる。

title

つながる境界

—閉ざされていた学生寮が、地域へ溶け込む—

concept

高度経済成長期、日本では住宅の大量供給とともに防犯のためや敷地境界として、コンクリートブロック塀が多く設置された。しかし、大地震によるブロック塀の倒壊や、中が見通せないブロック塀は防犯上逆に危険ではないかということが危惧され、近年の住宅では、塀が設置されない事も多く、設置されたとしても透過性の高いものが選ばれるようになった。そうしてできた新興住宅地などでは、塀が取り払われたことで開放感があり一見街並みが美しく見えるが、住民の生活は内へ内へと閉じていっている傾向もある。

そこで、現在コンクリートブロック塀という一本の線で区切られている学生寮と雑司が谷の街の狭間に、中間的領域となる建築空間を設ける。厚みのある境界は、二つの領域を緩やかにつなぎ、地域住民と、学生との新たな交流の場となる。

フリーマーケットが開催されたり、図書館や学童保育施設があったり、ひとつながりの境界の中で地域住民との交流が行われることで、そこを起点として、活気ある街並みが広がっていくことを期待する。



林雅子賞

遠藤 由佳さん

2016年度卒業 建築デザイン専攻 篠原研究室





審査員賞 **手塚賞** 米倉 春采さん 2016年度卒業
居住環境デザイン専攻 篠原研究室

title 城となる家並み ー集い、働き、住まう民主主義の城ー

concept

かつて城は都市であり、仕事場であり、住居であった。しかし多くの城は取り壊された。そこで私は、城を失った城下町佐倉に、昔の「城」に代わるシンボル性と求心力を持った建築をつくる。

生活の風景こそ現代を表現する核であり、民主主義を基調とする現代に提案するべき城なのではないかと考え、市民の愛着ある佐倉新町商店街の建物形状を各ユニットとして積層させた「現代の城」を提案する。1ユニットの中では住居と仕事場と商業の機能が混ざり合い、生活がにじみ出る。求心力を持った町のシンボルは愛され住み継がれてゆく。



審査員賞 **西田賞** 村山 愛さん 2016年度卒業
建築デザイン専攻 篠原研究室

title こやごや暮らしー小屋で営むのびのびとした暮らしー

concept

「屋根」と「農業」をキーに、都市部の家族連れや農家希望者を対象とした、食材の提供を通じた観光業との結びつきを強める第六次産業的な農業体験施設を提案する。住民の暮らしと関わる川や場所が命名されていることを発見し、その6地点に必要な機能を分散させる。住民主体の活動を生み、ここでしか体験出来ない・味わえない魅力を発信していき、緩やかに生活を営むこの農村地域の未来ものびのびと続いていって欲しいと考える。



審査員賞 **阪田賞** 阿部 祥子さん 2016年度卒業
建築デザイン専攻 篠原研究室

title 弓削ポタリング ー民家における『はみだし』の増築ー

concept

地方衰退の道をたどる離島の新しい観光産業の提案。

周囲18kmの弓削島を一周する既存のサイクリングロード上に宿泊機能を分散させた四つの古民家を配置し、ポタリングロードへと変化させる。

母屋はそのまま使用、放置された広大な庭に母屋からの「はみだし」を増築し、人の振る舞いを隔てていた境界を繋ぐ設えへと変化させる。些細な操作で、内部に留まっていた人の振る舞いが外へとはみだし、地域との繋がりを生むことを期待する。

topic
2

天野 芙美 さん 2016年度卒業 居住環境デザイン専攻 平田研究室

東京都公園協会賞 奨励賞を受賞

天野芙美さんの卒業研究論文が、東京都公園協会賞論文部門で、奨励賞を受賞しました。

title
防火樹の現代における有用性について
ー寺院・神社・公園に現存する樹木の比較調査ー

論文概要

日本では古くから植生資源の活用が図られ、樹木による防火機能もその一つである。木造家屋が多い日本の都市部において市街地大火による被害は甚大なものと予想され、それらを低減することは重要である。本研究では日本に古くより存在した「火伏せ木」の言い伝えと樹木の防火機能のデータに関し既往文献から抽出する。さらに、現代の都市空間に存在する樹木をそれらのデータをもとに調査し、木造密集地域における樹木の防火面での有用性を示すことを目的とする。調査対象は火伏せ木の伝承を受け継ぎ得る寺院と神社、樹木が多く残り得る公園より、規模を揃え各5ヶ所ずつ選定した。調査の結果、遮蔽性と耐火性の高さが評価される植栽帯は神社で最も多く、次いで公園、寺院の順に見られた。

受賞理由

樹木の防火機能に関する歴史的な伝承を整理した上で、現状の都内の社寺や公園内に存在する樹木とその防火性に着目したユニークな研究でその着眼点には新規性がありきめ細やかな調査は評価に値する。都市インフラとしての緑被地のあり方や課題を示す有意義な試みである。



授賞式でスピーチする天野さん

住居学科 第3回卒業生 長谷川 愛子氏より 貴重な雑誌・書籍を 寄贈していただきました

長谷川愛子さんは住居学科の卒業生（生活芸術学科3回生）で、1960年代初頭に月刊誌『建築』の編集に携わった後に鹿島出版会に入社し、建築雑誌『SD』の創刊に関わり、その後、編集長を務めました。雑誌『SD』自体は2000年12月号を最後に休刊になっていますが、建築・都市デザインに関する良書を刊行するSD選書シリーズは手に取ったことのある人も多いはずです。

この度、ご親族のご厚意により蔵書の一部を住居学科図書室にご寄贈いただきました。しばらくの間、特設コーナーを設置していますので是非ご覧ください。

